

「けんちゃん、ひみつきち行こうよ。」

まさくんは夕方になるといつもけんちゃんをさそいます。

「ちょっとまってて。」

そしてふたりで、うら山のひみつきちにむかうのです。

ここはむかしは20けんほどの家がある集落でしたが、いますんでいるのはまさくん一家とけんちゃん一家だけになってしまいました。それもそのはず、ここは街から山を二つも三つもこえたところにあり、すむのにべんりではなかったからです。

でもそのかわり、わくわくするようなあそび場がいっぱいありました。まさくんもけんちゃんも、家のまわりの山や森、原っぱぜんぶがだいすきでした。そして、うら山の中にはふたりだけのひみつきちがありました。同い年のふたりはなかよしで、まい日ここですごしていました。

ある日、いつものようにひみつきちであそんでいると、けんちゃんがまさくんに、「あしたはまさくんのたんじょう日だから、なにかとくべつなことをしようよ。」と言うのです。そうです。あしたはまさくんの5さいのたんじょう日なのです。

まさくんはすこしかんがえてから、

「それじゃあ、おとうさんおかあさんにないしょで、ふたりで『えき』にいつてみようよ。ぼうけんだ！」

つぎの日は、あさからふたりはわくわくしていました。あさごはんをたべると、ふたりはおとうさんやおかあさんにひみつきちへ行くとなつたえ、山をとびだしました。そして、とおくはなれた「えき」にむかってあるきはじめました。

おとうさんやおかあさんからは、「えき」はでんしゃがとまるところだということを書いています。けれども、ふたりはそのほかのことはなにも知りませんでした。おとうさんやおかあさんから、でんしゃがあぶないから行ってはいけないと言われていたからです。

『『えき』ってどんなところなんだろう?』

ふたりはくも一つない青空の中、ぼうけんをつづけました。

「えき」についたころには夕方になっていました。はじめて見る「えき」にはでんしゃが1台とまっていて、ふたりは目をかがやかせました。

「ねえねえまさくん、これぼくたちのおとうさんおかあさんだよ！」

まさくんもいっしょに見てみると、そこには4つのしゃしんがはられていました。

「これ、何て書いてあるんだろう?」

「うーん。わかんない。」

ふたりは「えき」をでて、ふたりをまっているおとうさんやおかあさんのいる山へかえっていきましました。

ふたりは小さくて、しゃしんの上にある文字がよめなかったのです。

——「殺人犯指名手配中」という文字が。